

れ、提灯をぶらさげて夜這に出かけました。夜明け方、泊り屋にひろげた八疊敷の大布団に、八方から冷えた足を突込んだのは昔語り、今は女性も交え、七夕の飾りが出来ると、川辺にキャンプ・フアイヤーを築しむように、近代化されています。

#### ◇ お盆

お盆は、十四日が精霊迎え、十五日が祭り、十六日は盆送りと、三日目が盆休みです。七月十四日、お座敷に祭壇を設けて、位牌を迎えます。祭壇は、若竹に、とうもろこしの茎、里芋等を添えて両脇に建て、花の咲いた葛の蔓を門型に結び、壇には芭蕉を敷き、かぼちゃ、茄子等の野菜、手造りの煎り餅等の他に、分家や類族筋から贈られた、菓子、そうめん等をお供として、香をたきます。

おやつ近く、「火を灯しに行こうや」と誘いの声がかかります、かねて用意の松明、(本来は油の多い檜に麻がらを添えたもの)をかかえて、墓地付近の道に集まります。やがて高さ一・五米ばかりの若竹五本と、三米ばかりの一段高い二本の竹を路添いに建て、これに火を点じます。黒い煙をあげて炎々と燃えつつげるところ、杖にすがって松明を仰ぐ老爺、路傍にしゃがんで物思いにふける中老、器にお米を入れ、お水を持った主婦、煙のゆらぐ干香を手にする老婆、無心にはしやく子供の群、黄色い落日を浴びて、仏と人間の世界が入りまじる種々相がしばしば描かれます——、やがて、下火になると、松明を一カ所に集め、竹竿をこの上に重ねて燃すと、パーン、パーンと爆竹がおこります。「さあ、仏様がござった」と、その火に水を注ぎ米を撒いて一拝ののち、各々の墓地へ参拝に向います、この夜、不幸のあった家には、初盆と称して参拝に向かい、軒下に竹竿をつるし、これに多くの灯籠をかがけて霊を祀ります。

## 大正町奥地へのこる施餓鬼行事

### 伊与木 定

幡多郡大正町木屋が内は、藩政時代の上山郷木屋が内村で、この内に赤岩、古宿という、慶長の地検帳に出ている古い小集落がある。ここでは昔から毎年盆の旧七月十四日におセカケという行事がのこっている。古式を今に伝えてまことに床しいものがある。

総戸数は古宿・赤岩を合せて八戸位であるが、両地区は年々交替で当屋の家に地区の老若男女が集り、盛んな施餓鬼供養を営んでいる。当屋の庭に七メートルほどの幟竿を立て、三角形の額縁の形をしたものを幟竿のてっぺんに取りつけ、これに昔供養した仏の戒名や菩提の文字を書いた五色の長さ八メートルほどの幟七流を通して、三角形を頂点にしてピラミッド形に八方へ引張って飾る。幟の古いものは、麻織で草染で五色に染め分けてある。

この幟を張った元へ、四本の青竹を立てて、これに二尺四方位に青竹を編んで棚を取りつける。この棚に芭蕉の葉をひろげて敷物とし、その上に供物を飾る。今年の初穂であるキビ、ナス、ブンゴイモ、栗、柿などを御神酒と共にまつる。この他にお茶、炊き初穂(御飯)を供え、線香をくゆらし、昔はワラビ餅をこしらえ、これをひらたくして棚に渡してある青竹にまたがして掛け、これをお笠と違って三個供えたものであったが、現在でワラビ餅の代用にもち米の餅を使っている。

寺で僧侶に祈念してもらったお札紙を棚の四方の青竹に結んでも

翌十五日は休み、十六日には盆飾りを近くの谷川に流して送ります、この日は厄日とされ、水泳、山仕事などはいましめられます、かくして、盆三日の休みが終ります。

#### ◇ 金剛草履

盆三日のうち、十六日には、長者の泉、大植には、金剛草履を作る風習が残っています、この日は、地藏や阿弥陀如来を祀る、お寺又はお堂と称する場所に集まって、大きな草履を作ります、周り凡そ一米五十程、長さ五十程程もあるものです、これに長さ三十程、中十程ばかりの、たらの木で造った白木の板に、大きな歯型の切り込みを刻んだものを添え、五米ばかりの竹竿の先にしばりつけて、部落の境に立てます、これは、魔除けとしたもので、この村には、こんな大歯を持った人間、こんな大草履をはく大男が居るぞーと、威嚇するもので、殊に、草履は、鼻緒の付け根からあとが、作りかけのままとなっていますが、これは、相手によって、まだこれから、いくらでも大きく作り直す必要がある大の男だという意味です、一寸笑わせるではありませんか。

#### ヒダナのこ

土佐清水市中ノ浜では、若い衆の娯楽の一つとして地芝居をした時、露天の観覧席の中央にマス(枡)といって竹で周囲をかこんだ畳半枚敷ほどのさじきをつくる風があった。これを土地でヒダナ(干棚)とよんで、部落の旦那衆(シ)やその家族の座とし、ヒダナでは飲み食いしながら芝居を見たという。ヒダナは、部落で六カ所ほどつくったという。(田城友義)

ある。施餓鬼供養が始まると、音頭の小野川磯太郎老人が、まず

オーミドロー ナーム オーミドロー

と唱え、つづいて脇音頭が、

エー ナーム オーミドロー

と唱える。同時に鉦と太鼓を四拍手にたたく。一同これに唱和して、これを「ひとにわ(一庭)」という。右のようなことを次の供養仏の順序により、計百三十三庭を繰り返して唱和する。

二十一にわ	御大師様	五十三にわ	大せがけ様
三十五にわ	皆念仏様	三にわ	日天月天様
三にわ	氏神様	三にわ	氏仏様
三にわ	水の神山の神様	三にわ	たいこ、かね様
三にわ	旗主様	三にわ	地神荒神様
三にわ	山みさき川みさき様		

一年一度の精霊に対する慰霊供養であるので、部落の人々は老若男女一同が当屋に集合して盛大に念仏を唱えるのである。新仏の初盆がある場合は、他に「七にわ」のオーミドローを唱えて精霊の冥福を祈る。以上の行事が終るとお供えしてあった御神酒を一同がいただき、少し気分が出てくると盆踊りに移る。踊りの音頭さんは太鼓に合合わせて石重丸や八百屋お七などの文句をクドイ、踊りの衆はそれをハヤシながら三拍子で行きつ戻りつ踊るのである。この時、若い娘さん達は網笠をかぶり赤いたすきを掛け、白たびを履いて幟の下の精霊棚を中心に行きつ戻りつ廻って盛んな盆踊りをやって終夜踊りくるるのである。

この他下津井、下道、中津川本村、森力市、四手の川でも行われている。